

当代中国地方志コレクションについて

高木 理久夫（資料管理課）

【館内は静粛に】

「おー、すごい!」、「見て、これ、わたしの故里!」— 中国からの団体訪問客が一斉に声をあげる一角が、中央図書館の研究書庫にある。地下2階中国語図書コーナーの先頭に置かれている、『中華人民共和国地方志叢書』のコーナーである。北京国家図書館等、一部の大図書館を除いて、これだけ市や県の地方志が集められ、なおかつ手にとって読むことのできる図書館は、もしかしたら、世界中でも早稲田大学中央図書館だけかもしれない。中国国内では図書の流通が限られており、とてもこれほど各地の地方志を収集できないという感想を、客人からうかがったこともある。まさに中国人ゲストのおもてなしコースにおけるメインコーナーであるが、図書館員としては、静粛であるべき研究書庫内での時ならぬ歓声に、うれしくもあり、内心、ひやひやもするのである — 「あのお、すみません、もう少し、お静かに、フラッシュ撮影はご遠慮ください」

【コレクションの概要】

現在、『中華人民共和国地方志叢書』のコーナーに配架されている、各省、市、地区、自治州、県等の地方政府が編纂、出版した地方志の冊数は、3,316冊である（事務用受入表による）。

さらに、どれだけ上記地方行政区に関する地方志をカバーしているのか、『中国行政区划地名手冊1999』（北京 中国社会科学出版社 1999）をもとに調査してみたところ（香港特別区とアモイ地区を除く）、3,200を超える地方行政区のうち、1,994箇所に関する地方志が所蔵されていること、すなわち中国の地方行政区のうち60%以上をカバーしていることがわかった。ただし、チベット自治区のように、複雑な政治情勢を抱えている地区があり（チベット自治区の現代地方志に関しては、2008年8月現在、当コーナーでは2冊しか配架されていない）、3,200のすべての行政区が地方志を出版しているわけではないので、「刊行された地方志のうち、どれだけの図書を所蔵しているか」という面で見れば、

カバー率はもっと上がるだろう。

【地方志による調査】

さて、このような中国各地で出版されている地方志によって、実際にどのようなことを知ることができるのだろうか。次に具体的な事例を記してみることにしよう。

◆自然環境について

本年5月12日、四川大地震が発生し、甚大な被害をもたらしたことは、まだ私たちの記憶に生々しい。震源地とされる四川省汶川県は、いったいどのような自然環境におかれた県なのだろうか。『中華人民共和国地方志叢書』コーナーには、2007年に刊行された『汶川県志（1986-2000）』が配架されている。この図書により、汶川県における地震状況について調べてみることにしよう。

第二篇自然環境に目を通して見る。すると他の地方志にはめったに記載されていない地震に関する記事が、第七節にまとめられている（52-54頁）。それによると、汶川は中国を南北にわたる地震帯、龍門山断裂帯の中央南寄りに位置し、地震が多く、揺れが激しいと記す。さらに、1986年から2000年までの15年間、県内で発生した「震級」（マグネチュードとは基準が違う）2.5級以上の地震に関する表（表2-5）と、県内及び近隣地区で発生した4級以上の地震に関する表（表2-6）が掲載されている。これらによれば、汶川県内では40回、県内及び近隣地区では16回の大きな地震が記録されている。したがって1986年から2000年までは1年間に4回近く、大きな地震が発生していることになる。まさに、中国有数の地震発生地区であることがわかる。ちなみに、汶川県の中心、威州城の全景カラー写真が巻頭に掲載されている。岷江沿岸にはすぐ急峻な山塊が迫っており、細長い市街地はまるで川に浮かぶ船のように見える。このような情景を見てみると、5月の大地震による被害は、想像に余りあると思ひ至るのである。

◆人物伝記について

清末の外交官で、草創期の早稲田大学図書館に

多大な貢献をした銭恂（1853-1927）。その妻、単士釐（1858-1945）は、日本をはじめ海外に渡航した経験を、中国人女性として初めて著し（『癸卯旅行記』光緒30年）、さらに幾つかの著作を有することで、近代開明期における先駆的な女性として、現代中国において評価が高い人物である。夫の銭恂は、彼女について、杭州蕭山の生まれで、父は同治元年の挙人で嘉興県学の教諭である「恩溥公」とすると、その家譜『呉興銭氏家乗』に記している。いったい実名は何と言うのだろうか。同治元年（1862）の挙人、すなわち科挙の第一段階である郷試の合格者だと言われても、その年の郷試の合格者など中国全土で星の数ほどとは言わないまでも、相当な人数である。そこで、彼が県学の教諭として活躍した嘉興県の地方志、『嘉興市志』（1997年刊）を『中華人民共和国地方志叢書』コーナーから取り出し、恩溥公の実名等について調べてみることにしよう。

『嘉興市志』は全3巻で、第3巻第48篇が人物伝記にあてられている。嘉興市は、2つの市轄区、2つの県、3つの市を含む大きな市で（地級市という）、ここには古代から現代まで、590人の伝記が収められている。その「海寧市」（蕭山は現在、海寧市に属する）の章、2201頁には単士釐の伝記が掲載されている。父の名は「棣華」といい、学識が備わった人士であり（「系飽学之士」）、かつて嘉興等の地で教諭をしており、単士釐はその家庭の薫陶を受け、博学能文であると記されている。単士釐自身の項目はないが、娘の伝記により、その実名を知ることができた。ちなみに、他の単氏を検索してみると、「単不庵」（1878-1930）なる人物の伝記が掲載されている（2195頁）。彼の父は沅華といい、棣華は伯父にあたり、二人とも宋学を修めていたことで名声があったという。蕭山単氏は、宋代、朱子にはじまる理学を家学としていたことがわかるのである。

◆当代の歴史について

この『中華人民共和国地方志叢書』コーナーに収められた地方志は、文化大革命後、1980年代になって各地から陸續と刊行されてきたものである。したがって、今だもって全容が明らかにされていない文化大革命期間（1966-1976）の、地方における情勢を、各地方志を定時的に見ることで、把握

することが可能である。たとえば、1966年5月16日は、中央政治局拡大会議により、文化大革命の綱領的文書である「中国共産党中央委員会通知」、通称「5・16通知」が採択され、文革がひとつの頂点に達した日である。この日を定点にして、各地の文革情勢は、どのように変化していったのだろうか、貴州省のいくつかの地方志から、その「大事記」に掲載された記事のいくつかを見てみることにしよう。

毛沢東が共産党の指導権を掌握した1935年の遵義会議で名高い、貴州省北部の遵義市、その『遵義市志』全3巻（1998年刊）によれば、「5・16通知」が党の幹部に伝えられたのは、5月27～28日のことだという（伝達された日付が記録されている）。6月29日、共産党遵義市委員会に「文化大革命領導小組」が成立、中学校では紅衛兵が組織され、旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打ち破れという扇動により、市内の文物が破壊され、7月21日には小学校の教師の多くが批判と陵辱を受けたという。貴州省西南部にある普安県の『普安県志』（1999年刊）によれば、7月26日、「普安県文化大革命領導小組」が成立し、10月には文革が猛烈に進展し、まるで考えが異なる紅衛兵が学校ごとに組織され、これまた考えがばらばらの群集組織、「戦闘隊」や「戦闘団」の一類が企業や機関において組織されたという。貴州省南部、独山県の『独山県志』（1996年刊）によれば、7月22～25日にかけて公安政法会議が開催され、文化大革命中の治安工作が検討されたが、普安県と同様、10月になり文革が激化、これに関わる情勢の中で、12月28日11時、恵水城で列車が転覆、死者1名、11名重傷、20名軽傷の重大事故が起こっている。

これら一連の貴州省における情勢は、同省の他の地方志中、「大事記」1966年の記事を抽出し、貴州省及び中国全体の情勢を対照させることで、より鮮明に浮かび上がってくるにちがいない。

以上、当代中国地方志について、今後、研究者の皆様方の、さらなるご利用を願う次第である。

（2008.10記）